

デートバイオレンス可能性尺度の作成について

小 畑 千 晴*

Construction of Likelihood to dating violence scale

Chiharu OBATA

要 旨

本研究の目的は、デートバイオレンス（dv）を予防するための尺度を作成することである。これまで夫婦間におきるドメスティックバイオレンス（DV）を調査する尺度はいくつかあるが、それらは実態把握を目的にした尺度であった。しかし、若い世代である中学生や高校生および大学生に対するDV予防のためには、今は起こってなくても将来の可能性を測定する尺度が必要である。しかしこうした尺度は今まで論者の知る限りないため、dvの可能性を測定し、予防教育での使用を想定した尺度を開発した。

I. 問題と目的

10～20代の若い世代での恋人間で起きる暴力を「デートバイオレンス（以下dv）」と言う。内閣府（2009）によるdv調査では、交際相手から身体的、精神的、性的暴力のいずれかを受けたことのあると回答した人は、女性13.6%、男性4.3%であった。同様の調査として、横浜市（2009）の調査（交際経験のある高校生・大学生を対象）でも、女子38.8%、男子27.5%が、何らかの暴力を受けたと回答していることからみても、若年期における恋人間暴力がもはや若者にとって身近な事象になっていると言えるだろう。

こうした調査結果を受けて、dvを防止する活動が必要との認識が高まっている。若い世代に起こるdvは、夫婦間に起きる「ドメスティックバイオレンス（以下DV）」や子育てにおける虐待につながる可能性があり、早期段階での予防活動は重要だと考えられているためである。既に高校、大学の一部では防止教育が行われ、徐々にその活動は広がりを見せている。一方で、内容の充実と改善が求められており（伊田, 2010）、その一つに挙げられているのが調査尺度である。

これまでのDV調査尺度といえば、最も知られているのがStraus（1979, 1996）による葛藤戦術尺度（The Conflict Tactics Scales: CTS）とその改訂版（The Revised Conflict Tactics Scales: CTS2）である。日本では、石井らがCTS2の日本語の標準化を行い、さらにそれを基礎にした簡易なスクリーニングテストであるDVSI（Domestic violence Screening Inventory: DVSI）（石井, 2003）や、医療現場で使用する目的に作られた「女性に対する暴力スクリーニングテスト
平成24年9月12日受理 *岡山大学教員 社会学研究科社会学専攻修士課程修了

(Violence Against Women Screen: VAWS)」(片岡, 2005)等がある。これらの尺度を含めたほとんどが、パートナーから暴力被害を受けたかどうか、どの程度うけたかという実態把握を目的にした尺度であるため、当然のことながら交際経験のない人たち、婚姻関係にない人たちは除外されている。DVの予防という観点から考えるならば、今はまだ問題が起こってなくても、将来それを起こす可能性が予測できる尺度の開発の必要性があるのではないだろうか。少なくとも、高校生や大学生を対象にした予防活動を実施するのであれば、交際経験の有無を問わず、すべての学生が回答することで、自分の将来の恋人やパートナーとの傾向を知ることが示唆できるような尺度の開発が、より効果的なDV予防につながると考える。しかしながら、国内外を見ても、dvの可能性を測定する尺度は、論者の知る限りない。従って、本研究では高校生や大学生対象にDV予防教育での使用を想定とした、dvの可能性を測定するための尺度」を作成することを目的とする。

Ⅱ. 尺度作成過程について

1. 尺度作成過程

dvに関する記述の収集、質問項目の作成は、dv臨床経験があり、且つ臨床心理士2名を含む心理学研究者3名により行われた。dvチェックリストや過去の文献、DVの臨床経験に基づいて計95件収集し、質問紙の意味が重複するもの、意味の不明瞭なものは削除された。また、特定の性に限定する質問項目をニュートラルにするために「相手」という言葉に変換した。議論の結果、身体的暴力、言語的暴力、性的暴力、対人的暴力、態度的暴力に分類し、計38項目を作成した。

身体的暴力とは、殴ったり蹴ったりするなど、直接何らかの有形力行使するものである。言語的暴力とは、言葉によって、相手の心を傷つけるもの。性的暴力とは、性行為の強要、避妊の拒否など一方的な性的要求である。対人的暴力とは、交際相手の友達関係、異性関係、所有物など相手の時間と空間すべてを把握し管理したいという欲求に基づく行為である。態度的暴力とは、言葉や身体で直接的に表現せず、意図的な無視や無反応によって相手を傷つけようとする振る舞いである。

2. 尺度の評定方法

質問の教示内容には「以下の項目をよく読み、あなたが異性との交際関係においてそれらの行動を行う可能性がどの程度あるかを想像し、当てはまる場所に○をつけてください。なお、項目の中の相手とは、想像上の彼、または彼女を指しています」と記載した。それぞれの項目について、「1：決してしないだろう」「2：多分しないだろう」「3：どちらともいえない」「4：するかもしれない」「5：おそらくするだろう」の5段階評定で回答を求めた。調査期間は、2009年11月から2010年1月。調査対象は、私立大学学生および専門学校生 計282名(男子123名/女子161名)である。平均年齢は、20.3歳、SD=4.94である。

調査方法は、大学および専門学校の心理学の講義時間を用いて質問紙を配布し、時間内に回収した。調査前に、回答を拒否する事が出来ること、質問紙への回答と成績などが無関係であるこ

Figure1. 質問紙

以下の項目をよく読み、あなたがそれらの行動を行う可能性がどの程度あるかを想像し、当てはまるところに○をつけてください。
 なお、項目の中の相手とは、彼、あるいは彼女を指しています。

おどろくするだろう
 するかもしれない
 どちらともいえない
 多分しないだろう
 決してしないだろう
 1 2 3 4 5

1	相手に腹が立つと、大声をあげたり、叫ぶ。	1	2	3	4	5
2	相手に腹が立つと、人前でも相手のことをバカにしたり、命令口調で言う。	1	2	3	4	5
3	浮気しているだろうと相手を責める。	1	2	3	4	5
4	相手に腹が立つと、相手が傷つくようなことを言う。	1	2	3	4	5
5	相手に腹が立つと、何を言っても無視して口をきかない。	1	2	3	4	5
6	相手に腹が立つと、暴力をふるう(平手で打つ、蹴る、噛む、腕や肩をつかむ、押す、たたく)。	1	2	3	4	5
7	相手に腹が立つと、物にあたる(たたいたり、壊したり、投げる)。	1	2	3	4	5
8	相手に腹が立つと、相手が大切にしているものを壊す。	1	2	3	4	5
9	性生活に対して、自分がリードする。	1	2	3	4	5
10	性行為は大事だと思うので、強要するかもしれない。	1	2	3	4	5
11	自分と離れているとき、相手が誰と一緒にいるかを知らうとする。	1	2	3	4	5
12	相手の持ち物(携帯や郵便物など)をチェックする。	1	2	3	4	5
13	相手の携帯の異性のメモリを問題にする。	1	2	3	4	5
14	相手の携帯の異性のメモリを勝手に消す。	1	2	3	4	5
15	相手の交友関係を気にする。	1	2	3	4	5
16	相手の電話に聞き耳を立てる。	1	2	3	4	5
17	相手の手紙を勝手に読む。	1	2	3	4	5
18	相手に一人での外出をなるべくしてほくないと伝える。	1	2	3	4	5
19	相手の友人との付き合いを制限する。	1	2	3	4	5
20	相手の一日の行動を細かに聞く。	1	2	3	4	5
21	相手が自分を最優先にしないときには、すねる。	1	2	3	4	5
22	相手が自分を最優先にしないときには、怒る。	1	2	3	4	5
23	相手にお金を求める。	1	2	3	4	5
24	相手が自分以外の人と、何を話しているのかを気にする。	1	2	3	4	5
25	相手に腹が立つと、わざと浮気をする。	1	2	3	4	5
26	次にどんな行動をするかわからなくさせてびくびくさせる。	1	2	3	4	5
27	相手が自分の意見に従わないとイライラして怒る。	1	2	3	4	5
28	自分自身の問題でいらしていることを相手のせいだと責める。	1	2	3	4	5
29	相手とトラブルになった時、自分のせいであることを認めない。	1	2	3	4	5
30	相手に腹が立つと、冷たい態度をとる。	1	2	3	4	5
31	相手に腹が立つと、相手が望んでいることを、意図的にしない。	1	2	3	4	5
32	相手に腹が立つと、相手が望んでいることを、わざと違うことをする。	1	2	3	4	5
33	相手に腹が立つと、相手が話しかけているのに、気付かないふりをする。	1	2	3	4	5
34	相手に腹が立つと、相手の言うことに反応しない。	1	2	3	4	5
35	何かをするときには、一人で決められることも、相手の意見を聞いてからにする。	1	2	3	4	5
36	相手が怒ったときには、黙ってしまう。	1	2	3	4	5
37	相手が起こった時には、すねる。	1	2	3	4	5
38	相手からセックスを強要されたら、嫌だけ応じる。	1	2	3	4	5

と、および個人を特定せず研究以外の目的には使用しないことを口頭と文書で明示した。なお、dv体験者に留意するために調査後のフォローの必要性も検討した。

Ⅲ. 結 果

1. 内容妥当性の検討

本調査で実施された38項目は、既存のいくつかのdvチェックリストや文献を基に準備されたものである。それらの中から意味の重複するものや不明瞭な内容が削除され、dvの行動を表す項目内容としてより適切なものが収集されている。また、記述の収集や項目選別には、dvの臨床経験を含む心理学研究者3名によって行われている。その38項目を、因子負荷量を吟味して、24項目が作成されている。こうした一連の手続きにより、項目は十分に内容妥当性をもつと考えられる。

2. 信頼性の検討

尺度の信頼性を示すCronbachの α 係数は、間接的暴力が.897、破壊的嫉妬が.836、直接的暴力が.832、一方的性が.635という値が得られた。一方的性因子の α が比較的低い値を示したが、各項目の因子負荷量が.40以上であること、および全体の α が.876であることより、ここでは十分な値であると判断された (table 1参照)。

3. 項目得点

項目の記述統計から天井効果や床効果はなく、因子分析に適したデータであることが確認された (表省略)。

4. 因子構造

質問紙の38項目について、主因子法Varimax回転によって因子分析した結果、固有値の差を基準として4因子解を採用した。そして、因子負荷量が.40以下の14項目は削除した。

Table 1に因子分析結果を示した。本尺度は、異性との交際関係の中で、相手に暴力を振るう可能性を測定するものとした。第1因子は、“冷たい態度” “話しかけても気付かないふり” “反応しない” など、態度や沈黙による暴力に高い負荷量が付与されたので、「間接的暴力」と名付けた。第2因子には、交際相手に対する愛情が、過度な支配や独占的態度として表す項目に高い負荷量が付与されたので、「破壊的嫉妬」と名付けた。第3因子は、第1因子と対照的に、“暴力を振るう” “責める” “怒る” といった相手に行動や言葉で直接暴力を向ける項目に高い負荷量が示されたので、「直接的暴力」と名付けた。第4因子は、性的行為の強要に関する2項目で構成されていたので、「一方的性」と命名した。

5. 下位尺度の男女差

Table 2に下位尺度の項目数、平均値、標準偏差、t値を示した。男女別の平均値を見ると、男性の方が高い結果となったのは、第4因子の一方的性であり ($t=12.27$, $df=282$, $p<.001$)、女性の

Tabel 1 因子分析結果 (主因子法・Varimax回転)

	因子負荷量				α係数
	1	2	3	4	
第1因子：間接的暴力					
相手に腹が立つと、冷たい態度をとる	.839	.102	-.055	.005	.897
相手に腹が立つと、相手が望んでいることを意図的にしない	.799	.120	.064	-.029	
相手に腹が立つと、相手が話しかけているのに、気づかないふりをする	.791	.142	.070	.094	
相手に腹が立つと、相手の言うことに反応しない	.697	.139	.136	.093	
相手に腹が立つと、相手が望んでいることとわざと違うことをする。	.693	.160	.182	.151	
相手が怒ったときには、黙ってしまう	.556	.065	-.028	.174	
第2因子：破壊的嫉妬					
相手の交友関係を気にする	.257	.803	-.112	.101	.836
自分と離れているとき、相手が誰と一緒にいるのかを知ろうとする	.207	.694	.092	.128	
相手の携帯の異性のメモリを問題にする	-.073	.662	.419	.062	
相手の電話に聞き耳を立てる	.180	.647	.139	.019	
相手が自分以外の人と、何を話しているのかを気にする	.328	.617	-.044	.155	
相手の持ち物(携帯や郵便物)などをチェックする	.058	.523	.472	-.012	
相手が自分を最優先にしない時にはすねる	.371	.522	.268	-.115	
相手の手紙を勝手に読む	-.128	.509	.427	.109	
第3因子：直接的暴力					
自分自身の問題でイライラしていることを相手のせいだと責める	.302	.043	.695	-.169	.832
相手に腹が立つと、暴力をふるう	.029	.368	.655	-.012	
相手の携帯の異性のメモリを勝手に消す	-.127	.274	.642	.155	
相手の友人との付き合いを制限する	.040	.370	.581	.142	
相手が自分を最優先にしないときには怒る	.234	.510	.538	-.126	
相手とトラブルになったとき、自分のせいであることを認めない	.518	.047	.518	-.007	
相手にお金を求める	.056	-.039	.502	.150	
相手の一日の行動を細かに聞く	.187	.468	.495	-.055	
第4因子：一方的性					
性行為は大事だと思うので、強要するかもしれない	.024	.052	.096	.760	.635
性生活に対して自分がリードする	-.070	.202	-.106	.670	

Table 2 下位尺度の項目数、平均値、標準偏差、t値

	項目数	全体(n=284)		男性(n=123)		女性(n=161)		t 値	
		M	SD	M	SD	M	SD		
第1因子	間接的暴力	6	2.95	.89	2.71	.89	3.13	.85	-4.01***
第2因子	破壊的嫉妬	8	2.22	.80	2.12	.75	2.30	.84	-1.84
第3因子	直接的暴力	8	1.71	.57	1.64	.55	1.76	.59	-1.65
第4因子	一方的性	2	2.29	1.00	2.97	.91	1.77	.73	12.27***

***p<.0001

方が高い結果となったのは第1因子の間接的暴力であった ($t = -4.01$, $df = 282$, $p < .001$)。第2因子の破壊的嫉妬と第3因子の直接的暴力では、男女差は見られなかった。

IV. 考 察

本研究では、10代から20代の男女を対象に、将来の恋人関係を想定しどの程度dvを引き起こす可能性があるかを調査するための予測尺度を作成することが目的であった。その結果、「間接的暴力」「破壊的嫉妬」「直接的暴力」「一方的性」の4つの下位因子が採択された。信頼性については、一方的性の値が低い結果となったが、全体の α 係数値と各因子負荷量から十分な値と判断した。

「間接的暴力」とは、相手に腹が立った時、「相手への冷たい態度をとる」、「相手が望んでいることを意図的にしない」、「相手の言うことにわざと反応しない」、等これまでの「精神的暴力」に分類されるが、dv調査尺度にはほとんど挙げられておらず、本研究においてDV女性たちの臨床経験から採用した項目である。この暴力についてtable 2の結果から、男性より女性の方が高い値が示された。間接的暴力に含まれる項目の共通点は、言葉や体で直接怒りを表現していないが、沈黙によって相手に怒りを伝えている事である。そのため、第三者からはわかりにくい。二人のダイナミックスの中で相手に強い衝撃を与えることのできる心理的暴力であると言える。女性の方が高い値を示したのも、殴る蹴るなどの直接的暴力では男性に合わないために使用する可能性が高くなったと考えられる。

性生活を強要したり、自分がリードするかもしれないと回答したのは、男性の方が高かった。これは、男性のジェンダーバイアスによるもので、性に対して男性がリードしなければならないといった固定的な観念が影響したものと推察できる。

次に、「破壊的嫉妬」「直接的暴力」では、男女別に平均の差は見られなかった。一般的に男性の方が、直接的な暴力を振るう傾向が高いと言われているが、本尺度では可能性を問うていることや、仮に回答者がこの種の暴力をするであろうと自覚していても、回答することへの抵抗もあると考えられる。

このように、質問紙調査であることや、dvの可能性を測定するという目的から、現実とは必ずしも一致するとは限らないという問題がある。しかし、本尺度の使用は、自分と将来の恋人(対

象) とのdvの可能性について考える契機になる尺度であると考えため、本尺度を「dv可能性尺度 Likelihood to dating violence scale: LDVS」と名付ける。これまで、防止教育の課題として伊田(2010)は「(dvの)概念・定義の紹介だけで終わっている」ことを挙げている。dvの理解度をチェックさせたり、身体的・精神的・性的暴力の具体例を挙げて、これはdvだからしてはいけないという注意をして終了するというパターンである。こうした自分のことと関連づけて考えることは難しい現在の防止教育に、LDVS尺度の利用と適切なフィードバックが大いに貢献できるものとする。

また、dvは、対象との病理的な連結による1つの結果である(小畑, 2007)。従って行動化され表現される暴力行為のみに注目するだけでは不十分である。対象にとっての暴力の意味や、対象のつながり方、あるいは対象関係のあり方にも焦点を当てる必要があるのではないかと考える。すなわち、従来の二次的側面だけでなく、自分と対象とのつながり方(一次的側面)を意識させることがdvの予防にはより効果的であるだろう。

今後の課題として、今回の調査対象は主に大学生であり、本尺度の使用対象として考えている高校生が含まれていない。従って、今後は高校生への調査が必要であると考え。また、今後のdv研究の方向性として、筆者はdvやDVは対人関係のあり方の問題であると考えているので(小畑, 2007)、Bion(1961)、Hafsi(2004, 2010)の対象とのつながり方であり且つパーソナリティ要因でもある「原子価 Valency」という概念との関連について調査したい。原子価とは、Bion(1961)がグループと個人のつながり方を説明するために化学用語を転用した概念であり、それをHafsi(2010)が「対象との一定の安定した形(類型)による繋がりと関係を可能にする個人的な心的準備状態」と再定義した。Hafsiによれば、原子価には、依存・つがい・闘争・逃避という4類型があり、その中でも、依存がdvと強い関連していると考えられる。しかし、実証的な検証が行われていないため、本尺度と併せて個人の原子価を測定する「Varency Assesment Test: VAT」(Hafsi, 2010)を同時に施行することで、dvとの関連について調査し、より効果的な予防活動に役立てたい。

< 文 献 >

- Bion, W (1961): Experiences in Groups. London. Tavistock Publications. (集団精神療法の基礎 池田数好訳 (1973) 岩崎学術出版社)
- Hafsi, M. (2004): 「愚かさ」の精神分析 ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2010): 「絆」の精神分析 ビオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路 ナカニシヤ出版
- 伊田広行(2010): デートDVと恋愛 大月書店
- 石井朝子、飛鳥井望、木村弓子、永末貴子、黒崎美智子、岸本淳司(2003): ドメスティックバイオレンス(DV)簡易スクリーニング尺度(DVSI)の作成および信頼性・妥当性の検討 精神医学, 45, 817-823.
- 片岡弥恵子(2005): 女性に対する暴力スクリーニング尺度の開発 日本看護科学会誌 Vol25, No3, 51-60.
- 内閣府男女共同参画局(2009): 男女間における暴力に関する調査報告書.
- 小畑千晴(2007): ドメスティックバイオレンスの発生要因に関する研究レビュー 奈良大学大学院研究年報 41-54, 12

- 小畑千晴 (2010) : Dating Violence可能性尺度作成の試み 日本心理臨床学会第29回大会 ポスター発表
- Straus, M. A. (1979) : Measuring intrafamily conflict and violence. The Conflict Tactics (CT) Scales. *Journal of Marriage and The Family*, 41, 75-88
- Straus, M. A. Hamby, S. L. McCoy, S. B. Sugarman, D. B. (1996) : The Revised Conflict Tactics Scales (CTS2). Development and Preliminary Psychometric Data. *Journal of Family Issues* 17. 3, 283-316
- 横浜市市民活力推進局 (2009) : デートDVについての意識・実態調査報告書